

招待席

岡本彌太

おかもとやた 詩人。1899（明治32）年～1942（昭和17）年。高知県我美町生まれ。本名亀弥太。1923（大正12）年、25歳の時に文学仲間の勧めで小学校代用教員となり、以後、生涯を教員として過ごした。『日本詩人』への投稿を続け、雄大なスケールの「黒潮」三部作・「室戸灘附近」などの大作を遺した。南海の宮沢賢治と称えられ、早世を惜しまれた。生前、1932（昭和7）年刊行の詩集『瀧』（詩原始社）を上梓した（その抄録が「瀧（抄）」として、電子文藝館に掲載されている）。続いて第2詩集『山河』の刊行を願ったが果たせず死去。没後56年の1998（平成10）年に関係者の努力で『岡本彌太詩集―山河篇―』（泰樹社）として刊行。『岡本彌太詩集―山河篇―』より「室戸灘附近」を掲載する。なお、一部差別的な表現もあるが、歴史的な作品なので、そのままとした。

室戸灘附近

万法流転有情悉皆肢体離反の沙の時限を吼える涛——ここに埋つて裂けてしまった漁村の数々がある。帆船がある。

（二つは崩潰した路にのつかつたまゝ、行路の無宿の不思議な宿になつてゐた）

天下一の荒灘——青鯨の横行闊歩する室戸灘。

けふは榕樹、橘の枝濃く霽れてどちら向いても蒼茫と鱗あざとの顎あぎとのきかきか光る黒い印度藍の圧倒だ。

ここの浪の屈折紋はとてつもなく大きくつて紫泥や金泥の竜のやうに次々に脱けあがつて凄い。

それらの巻絵がさらはれたとき真白い貝沙を一直線にかける千鳥はとても岸にゐる鳥の類でなく象徴文字の形のやうに怪しい。

ぢき轟いて奔騰する白い汐霧に揉まれてみえなくなる——あるひはそらかける美麗な
縞魚の類かも知れない。

亡き詩客滝川の褒めちぎつてみた竜飛万年の大きな岩の錯落、
どつと押しこめる潮の白玉楼のしたであれの海の血の詩が鳴つてゐる。一奇だな。け
ふは地獄の釜の蓋のあく孟蘭盆うらぼん太陰七月十五日——倒懸の火焰苦の救
はれる日だ。

巖礁を伝へば

岸の窪みにわづかなる水溜りあり

いつのほどか来りしを知らず

縞模様美しき小魚住めり

荒海の浪の音真近にきこゆるに

小魚ら

嬉々としておのれの世界に生きてあり

(滝川遺稿)

綺麗な縞魚になつた——水脈のあとにのこされて無上の天地を岩の隙間ではねてゐる。
会ふてゐるのか、離れてゐるのか、もう何もかも綺麗さつぱりとしたこの現世の花鳥
介ながめの絵になつて嬉々とした声が松籟にまじつてすると思つたのは、
若い橘の紫のうつつとした翳のせるであらう。

とにかくおれの喉はかわいてゐる。

その岩壁を翔る海燕の翳のくつきりと濃い真昼を裂いておのれの乾いた喉仏からも
紫の火の玉がとびでさうだ。

深沈たと闌けた岩畳には何百万年が腐蝕し
何千万年の白涛の劫が鱗の口をあけて待つてゐる。

この世の泡あぶくの錦絵を

彫つてあるく蟹行人——炭酸石灰の遺骸の雨の堆積物（珊瑚礁ならこの印度藍三〇涇
の沖に沈下してゐる）——俺と、それから砲火好虚の裔の横つ腹を抉つて当住不断
の口をあける室戸岬の風涛の葬楽、

無明の闇の鱗の鋼の鼻さきをひん曲げて夜も昼も吼えつゞけ真黒い時を吞吐する絶対

自由の真白い奔騰と突進。

この蒼黒い風景の突端から直下百尺を鉛のやうに落下して青鮫に舌うちさせた青年があつたさうだ——まるで足の痺れることだ。そんな鮫の内臓をもつた若人にちよいと惚れて俺もぐらつく石の反射に身をかゝめてぞつとした。

黒竜魑魅の衝つところ渦まく絶体自由のあるところ、首のなくな

つた青年たちは来給へよ。正に自殺も日本的だ。

*

青い玻璃飾のビンロー樹の疎らなところ、さつきからぼりぼりやつてゐるのはこの早天にほとけをさがす癩の夫婦だ。怒つてゐるのか、泣いてゐるのか、この世の浮草の表情の襞はとれて黒い洞がこちら向いてゐる。臍のあたりまで犯した火雲のピラミットは崩れたりさかまいたり、あたまのホータイの膿水まで真珠いろに焰えさかつてただ肉体のそこのおとこが女の悲鳴のやうに呼んでゐる。——傾斜の崖の噎ぶ汐霧——。

一文だつて

もう憐憫のない僻遠の黒い太陽光をよろけてきて女体馬首のほとけの情に生きのころ裂帛の構へは燦として目もあてられぬ。

白雨はもう鱧のあぎとをはなれたのだ。

沖から黒い束になつてそのむくれた夫婦の跛を犯してゐる。

黒雲礁——

こどもの髑髏のあがつたところを呑みこんだ白い竜は懸て断崖のそこから逆巻いてそこの磯松の烏を叩きはらつて沛然と来る。

おれも首のないこどもも癩病も大きな天をさゝへる鉤形の岩の隙間にひそまつて真黒い幽明界の咆哮を聴いてゐる。

*

烈日碧く三界にあまねく

馬頭観音は石に熟眠してそこゝの美しき磯魚の遊泳に囲まれたまふ。
これも安らかにほとけの旅の眼をとぢる天刑の病の涅槃の夫婦、
真上の青い巻絵のそらを程よくとゝのへて恒河風ガンガに茂る夏の橘の枝、やが
てそこらの同病の二三鳥も美しい涛の射光に腰からしたをきらりと時劫のなかに彫
られてしまふ。

Okamoto Yata

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on April 17, 2009